

亜細亜大学最終講義～学生へのメッセージ～

『日中貿易の過去・現在・未来 ～日中貿易に五十年携わって～』（抜粋）

前亜細亜大学顧問／環日本海経済交流センター長 藤野 文悟

1. 中国の50年前といま

今日は私の中国論の話をしたい。その中には日中貿易も含まれているから中国はどんな国なのか、これからどのようにになるのか、日本との関係はどうなるのか、われわれは中国をどう見て、どう付き合い合っていくのかということをお話したい。

私は1959年に伊藤忠商事に入社し、今までちょうど半世紀、50年たったが、その前の大阪外国語大学の4年間を入れれば54年間、中国と付き合い、中国と格闘してきた。まさに私の人生のすべては中国だけと言っても過言ではない。

その中のご縁があり、亜細亜大学にお招きいただいたということは、私にとっては大変光栄なことであった。こうして若い人たちが育って巣立っていくと本当にうれしく思うし、あなた方が将来の日中関係を背負ってくれると思えば、もっとうれしく思う。

さて、今の中国はどのようなかということは、私が伊藤忠に入ったちょうど50年前に見た中国と、今の中国はまるっきり違う。大変な変化をした。しかし、私なりの中国観では中国はそんなに大きく変わったのではない、というのが私の見方。今の中国はGDPではアメリカに次いで、ドイツを抜いてしまった。貿易も圧倒的に世界の最先端にいて、世界最大の外貨保有国になった。もちろん13億の人がいるから、一人当たりの所得は大きくはないが、巨大な国力を持つ国になっていった。

これらの結果を踏まえ、私の得た結論は、中国は環境が変わっただけであり、中国人のDNAや本来の気質は以前と少しも変わってはいない。潜在力を発揮できるようになったから現在の中国に

なった。

考えてみると、パックス・ブリタニカ（イギリスによる世界覇権）にはじまり、20世紀はパックス・アメリカーナ（アメリカによる世界覇権）だったわけだが、それ以前は中国が最先端であった。イギリスの産業革命前は全世界のGDPの3分の1を中国が握っていた。それが最後の清朝、満州族が天下を取った時代に中国は腐敗していき、産業革命に乗り遅れてしまう。巨大な大国がいつの間にか半植民地のようになってしまった。こうした歴史の時間はそんなに長くはなく「中国はしばらくの間、タイムトンネルの中にいたのだ。しかし必ず復帰してくることは間違いない」と思っていた。

入社した頃の日中関係は、本当に小さな商売でつながっていただけ。日本も松村謙三や田川誠一らが細々と日中関係の糸をつないでいた時代であった。日本は完全にパックス・アメリカーナのアメリカの影響下にいた。そのころ、「中国をどう見るか」などと私が大きな声で言っても誰も相手にもしてくれなかった。

しかし、私が会社に入ってたった50年、一人の歴史では長いかもしれないが、歴史の中でたった50年の間で急にこれだけ変わるといことはあり得ない。大きな潜在力と伝統と文化があったから変わっていったのだ。

1959年、会社に入ってしばらくして中国へ行ったが、1966年から文化大革命が始まった。76年まで10年間、中国は文革という波の中にもまれて、77年に鄧小平が復帰し、改革開放路線が始まったが、鄧小平の存在だけで中国があつという間に変

わるはずはあり得ない。また、文化大革命が10年あったからといっても、中国の歴史が全部根本からひっくり返るわけでもなかった。それは簡単に変わらない中国人の文化と伝統といったものが、基本に強く存在するからである。

今後パックス・アメリカナがなくなったら、世界はどうなるのだという意見がある。パックス・コンソルティスという人もいる。要するに協調の世界が来るということだ。アメリカは若い国で中国は数千年の歴史を持った古い国なのでそう簡単に、同列で比較することはできない。

2. 長い歴史・文化・伝統から中国を理解する

私は、日本は非常に複雑な場所にいると思う。アジアの中の一極ではあっても、アメリカの影響力を非常に受け、さらに前には産業革命を必死になって受け入れに行き、早い時期から発展している。中国・アジアの伝統・影響を排除しようとしたかどうかは分からないが、結局はできなかったと思う。その中で、中国は文革も経て、鄧小平の改革もあり、89年天安門事件もあったが、一貫して発展している。今や世界のGDP、貿易において上位の中国を抜きに世界の金融体制を語ることはできないという時代に、われわれは中国をどう見ていくか考えていくと、中国の根本にあるのは長い歴史と文化と伝統であるということをぜひ理解していただきたい。

鄧小平は改革開放路線で市場経済をやろうと言った。以前の中国では一般の庶民がそれをものすごくやりたかったが、政治優先路線で簡単にはやらせてもらえなかった。「やっていいよ、おれは何も文句は言わないよ」と言った途端に発展した。

隣にいる日本では、かつて遣唐使を派遣し、中国の伝統・文化を学んできた。そのうち、あまり中国のことばかりやっていると、日本がつぶれそうだと思い、遣唐使をやめたという歴史がある。そこをよく考えて、中国問題を見ないといけない。

皆さんが今後中国と付き合いしていくときに、中国の歴史、文化、長い伝統について、また中国人

はどういう発想をするのかということをよく考えないといけない。目の前にあることではなく、長い伝統と歴史の中で一つの答えが必ず出てくる。ちゃんと理解し、付き合っていないと、われわれは非常に難しい状態に陥るかもしれない。

私は半世紀、中国問題と格闘しているが、中国を勉強すればするほど奥が深くものすごく多様な国なのである。なぜ中国が一つにまとまっているのか日本人には分からない。

日本人は単一の発想をする民族で、白か黒か常に結論を出したがる。中国はそうではなく奥行きが深く、今日と明日は異なるような場面がたくさんある。しかし常に矛盾しているから駄目だということにはならない。どこかで協調し時間がたてば、それが一つの形になっていく。それが中国問題の奥深さである。われわれは時間をきちんと見る能力を持たないといけない。

アメリカは中国と似ている。アメリカをつくったのはWASPという人たち。ホワイトであり、アングロサクソンであり、プロテスタントの人たちが引っ張ってきたが、アメリカは合衆国で、多様な国家になり、そしてオバマという人が出てきた。多様の中の初めての多様がアメリカで実現したのである。

中国は最初から多様であった。60%ぐらいは異民族の王朝で最後の王朝、清朝、ラストエンペラー、これは満州族であり漢民族ではない。しかし、それは中国という大きな風土の中にきれいに吸収されている。

それを日本人がどこまで理解するかによって、日本の外交は変わっていく。目先だけの視点ではなく、問題はそれをどううまく処理していくか。それはお互い知り合ってやっていかなければいけない。

18世紀まで世界の中心であり様々なものを発明してきた中国は、タイムトンネルに百何十年間入ったけれど、またタイムトンネルを抜けてきたという理解で正しいと思う。遣唐使を多く派遣し、また、奈良、平安、江戸時代に中国の朱子学を取

り入れ、儒教思想が日本の基本的な国教であった歴史を考えると、日本人はもう少し謙虚になる必要があると思う。そうすれば、中国と対等の付き合いができるはずである。中国は元来好戦的な民族ではない。中国内では、戦国時代まで春秋戦国など、諸侯が割拠した時代はたくさんあるが、海外に出て植民地を多くつくってきたという歴史はない。18世紀まで世界の富の3分の1を生産しながら、そうはしてこなかった。話し合いで相互理解することで、長い文化と伝統を培ってきた民族だということを我々は忘れてはいけない。

しかし、欧米諸国は戦うことによって立ち上がってきた。武器を多く生産し、より多く武器を持った者が世界の覇を唱えていた。今はドルが基軸通貨である。しかしそのドルが世界中を回っているから金融危機になったのである。

3. 大国になる素質を持つ中国

外交問題については東シナ海の油田の開発などたくさんある。駆け引きはたくさんあるが、相互に手を握ってやろうと言えば必ずできる。

冷静に現実をみると日本の最大の貿易国はアメリカではなく中国なのである。日中貿易が日米貿易を抜いてしまったのである。この状況を50年前に想像している人は誰もいなかった。話をしても当時は受け入れてくれなかった。私は日本は少数派を大事にしない国だと考えているが、マイノリティーが生きる社会ほど民主的で発展する社会なのである。マジョリティーだけの国というのは一番危ない。従って、自分の意見を怖がらずにきちんと話をするということが大事なのである。私は中国問題を半世紀もやってきて、本当にそう思っている。少数派の意見を述べるのはものすごく大事なことなのである。

亜細亜大学の元理事長の瀬島龍三さんは、伊藤忠で専務になった頃、私の上司だった。瀬島さんと私と社長と3人で組んで、日中貿易にチャレンジした。そのとき、会社の中は誰もサポートしてくれず圧倒的な少数派であった。少数派を恐れて

はいけない。そのためには勉強をする必要があるし、ものの本質を勉強しないとイケない。

あなた方がこれから生きていく上で、中国を抜きにして何もできない。結局、中国でいろいろなものをつくる。例えば伊藤忠ではアサヒビールと組んで、青島の近郊で農園をやっている。そこで野菜もつくり、日本に持ってこざるを得ないのである。中国に行けば十分な労働力もあるため、きちんとしてもらえる。われわれの生活は中国抜きに考えることはもうできず、もう国境はないというつもりで生きていかないと仕方がないのである。

現在、世界で金融危機が起こった。大企業は多くが大赤字である。そうすると、下請企業は発注が来ないため大変困る。日本は98%が中小企業であり、その人たちが物をつくってうまくいっている。受注が来なくなったら、路頭に迷ってしまう。今後どうするのか。日本全体がどうなるかという話なのである。

そうなったときに、生き残りを懸けて日本の企業が動くとしたらどうするか。日本では国内市場などは期待できないため、このとき我々はどうするかというのが、日中問題であり、本当はあなた方の今後の生き方が懸かっているのである。中国を理解し、中国とどう付き合うか。中国の人と付き合える人が一人でも日本に多くいれば、日本はやっていける。

では、なぜ中国が大事なのかというと、中国は大国になる条件を持っている。私の考えでは、大国の条件とは、①国が広いこと、②人口が多いこと、③多様であることであり、③が一番大事である。価値観は一つではなく奥深い。中国は13億人のマーケットがある。そして歴史と伝統がある。中国は圧倒的に大国になれる素質を持っていることになる。

しかも、今、発展しているのは沿海地帯ばかり。上海を中心とする華東地区、広東を中心とする華南、せいぜい北京や天津を中心とする環渤海や大連、青島まで。この辺りだけで中国のGDPの70

%を占めているが、圧倒的に広いのは内陸である。例えば揚子江をさかのぼっていけば、湖北省、湖南省、四川省。黄河の上流は蘭州、やがてウルムチなどに行くわけである。そこには、まだまだ発展していない人がたくさん住んでおり、ここは必ず発展していく。

これらを考えると、我々の生き残りを懸ける国、我々の企業が生き残れる国というのは、圧倒的に中国でありアメリカではない。緊急経済対策に目を向けると中国は7割ぐらいが鉄道などのインフラ整備に使い、あとは農村の安定に使う、そして農村がだんだん発展していく。大体6カ月待てば効果が出てくるだろうと考えている。従って、09年の後半には、中国の経済対策は動き始める。8%の経済成長の実現性は不透明だが6.4%という統計もある。

これからの中国をどう見るか、中国は好戦的ではなく大国になる条件はある。しかし、協調主義である彼らを私たちがどう理解するか、学生たち一人一人が中国の若者とじっくり話をし、新しい日中関係を創ってもらいたい。

4. 沿海部より内陸に目を向けよ

中国人のすごいところは、個人の貯蓄率が猛烈に高いことである。これは日本人もそうだが東洋人に一般的なのである。従って中国で車が急に売れなくなるということはない。

政治体制に目を向けると中国は共産党や一党独裁だといわれるが、一つの政府がないとこの多様な国家を一つにまとめていけない。結局は共産党にこだわらずに立派な党でありさえすればいいのである。鄧小平さんは沿海地帯を發展させ、中国を世界の最先端、市場経済のナンバーワンに持っていきたい。そのために上海、広東、深センを發展させ、貿易第一でここまで来た。

中国のGDPの4割は輸出、GDPの中で7割近くは輸出入、つまり貿易なのである。中国は外需に依存し圧倒的にアメリカに物を売ってきたが、現在は販売不振に陥ってしまい、広東、深センの

工場は何万社も倒産した。労働者はどこへ行くか、みんな郷里に帰る。それが中国の奥深いところなのだ。田舎へ帰っても仕事がないため、政府は農村に資金を投入して農業を發展させ、中小企業を内陸で起こす。そしてインフラや学校、病院も造る。これで雇用を創出しようとする。

従って外需依存の鄧小平の政策は、一つの終焉を迎えた。胡錦濤は任期が2012年までなのであらずか。胡錦濤さんはポスト鄧小平の政策をこれからどう乗り越えていくのか。

それは、中国の国内を満遍なく發展させて、貧富の格差を減らしていく。つまり、沿海でもうけた金を内陸に送るということである。

従って、あなた方の仕事は沿海より内陸にあるかもしれない。喜んで四川省や甘肅省や新疆ウイグル自治区へ出掛けていくなどの発想の転換をすればあなた方の未来は開ける。もっともっと将来を見据えて、どこで自分が生きるか。若いのだから、チャレンジしないと駄目である。冒険をする気持ちを持ってやっていただきたい。

中国は、日本人が新たな発見をする旅路を手伝ってくれるはず。私はそう思っている。胡錦濤の次に出てくるのは、習近平か李克強などがいるが、集団指導体制で中国を引っ張っていくだろう。中国はだんだん民主化をしていくが、中国共産党が政権を誰かに渡すということはしばらくないだろう。仮にそうなったら混乱が起こる。混乱が起こって一番困るのは誰か、日本人である。そのこともよく考えて、中国とどう組むかを考えていかなければならない。

5. 日中間で共通の価値観を持つ

中国人と日本人は全く異なる。50年付き合ってみて、本当によく分かる。しかし、こちらが裸になって付き合おうとすれば、彼らは必ず対応してくれる。それが中国人の文化と伝統、歴史である。目先の付き合いだけでは駄目で古い付き合いも長くやっていく。それがあなた方の日本の将来をつくっていくのである。

今度の世界的な経済危機を経験し、中国的発想がにわかに注目されている。日本と中国は共通の価値観を持てるかもしれない。渋沢栄一といい、かつて日本の経営者は、全て自社の利益のためではなく、国民のため、民のためになるようにしなさいという教訓を残している。今後そういう経済学が出てくるかもしれない。

これまで日本人は価値観とは何かということを実際に考えたことはないと思う。本当の価値観とは民主主義、人権、自由ではなく歴史や文化、伝統なのである。

ドル基軸通貨の世界は終わったと考えなければいけないだろう。中国は1兆9,000億ドルの外貨準備金を保有してしまったため、ドルを無碍にはできない。ドルが下がれば下がるほど、中国は損をするが中国はすでにドルを基軸通貨とは見ていない。世界に基軸通貨という時代はもう来ないであろう。そこで私は円と人民元が組むべきだと思っている。

かつて、ある日本人は「中国人民幣なんて紙切れだ」と言ったが、今や世界で人民幣が非常に重要な通貨になっている。円と人民幣が、どれだけ重要な通貨であるかというのを考える必要がある。

Asian Currency Unit (ACU) という言葉があるが、これはアジアの一つの通貨体制をつくるというものであり、今後考える必要があるだろう。そして、共同市場を創っていくためにまず行う必要があるのは、日本と中国と韓国、この三カ国が話し合いをすること。これらの国は価値観を共有できるはずなのである。こうやってきた今の時代、今、日本にとっては話をする絶好のチャンスである。「胡錦濤さん、あなたは何を考えていますか」と言うべきなのだ。そして一緒に手を握りましょうと。

6. 少数派を恐れず世界と協調するべき

そして、ASEAN+3を考える。+3で少なければ+6でもいい。インドとオーストラリア、ニュージーランドを入れて、このアジア太平洋地

域で一つの共同市場をつくっていく。これは今後やる必要があると思う。皆さんがそういう発想になり様々な企業に勤め、その中で少数派を恐れないということがあなた方にとって必要なことである。今、世界は大転換、100年に一度どころではなく、世界の価値観が変わろうとしているのである。その中で企業はみんな変わる、従来のシステムではもうやっていけないのである。

もう一度、原点に戻ってやり直さないとけない。その原点に中国がいる、日本がいる。今や我々は一番近くにいるところと手を握っていかざるを得ない。

毎日の小さな仕事でもいい、中国とどう組んでいくかが大事であらう。中国人と日本人は、ものの考え方も歴史も文化も全然違うがどこかで交わる伝統はあるはず。我々は中国から文化を輸入し、しかも長い歴史がある。その中で交わる場所は確実にあるのだ。

中国は本当に奥深く勉強をしてもしすぎるということはない。従って歴史はよく勉強してほしい。中国は毛沢東の時代、文化大革命の時代、天安門事件といった、様々なことを経験し発展してきている。彼らは教訓を生かすことができる民族なのである。

日本は一つの方向に収れんしたがるが、中国人は収れんしないが全体でどこかで収れんしている。本当にすごい潜在力がある。

今後、どのように秩序をつくるのかというのはこれからの問題だが、アメリカ、中国、ロシアの3人がトップを走っており日本は2番手の先頭ぐらいであらう。従ってその辺をどうコンサルテ=協調を図っていくか、今後の世界がそれを問われるだろう。